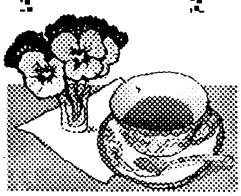
戦争の本質を見よ

――戦争と平和の人間学的考察――（その一）

小林　直樹



まえおき

戦争論（およびその対概念である平和論）が、花盛りである。改憲・護憲のホットな論争の焦点に、「戦争」を放棄した第九条があるこの国で、それは当然である。改憲論を推進してきた保守の支配政党は、以前から「自衛のための戦争」は、譲りえない国家主権の一部だと主張し、「自衛隊」という名の戦力を強化し、戦争を前提とした〝有事法制〟まで整備するに至り、日本を〝戦争が出来る国家〟に仕立てるために、憲法九条の改訂を求めている。これに対し護憲論者は、海外派兵をはじめとする違憲行為を非難し、九条の不戦の誓いを堅持すべきだとしてきた。この立場をとる人びとは、単に一国の平和を祈念するだけでなく、戦争放棄の条項を人類共生のための指針として、世界に向かって発信したいと考えている。私もその思いを抱いてきた一人である。

ところで、右の二つの立場の間には、対立だけがあって対話はない。思想の闘いである以上、当然かもしれないが、一般国民を間に挟(はさ)んで言論戦を行なうからには、互いに痛罵しあうだけではなく、論議の絡み合うアリーナ（試合場）が必要であろう。国会がそういう場になりえていない今日、私どもは何とか言論の切り結びが出来るアリーナを、少しでも広く作っていくべきである。もともと健全な民主社会ならば、普通の市民も加わりうる言論の場があって、参加者は、そこでの討論を通じて、説得や反省（自己検討）の機会を得ることができる筈である。言論の市場が一応開かれていると見られる日本では、そういうタテマエが通用しそうだが、現実にはそうなってはいない。改憲vs護憲といったシリアスな政治的問題については、情報諸機関（とくにマスコミ）は実際上かなり現実的政治の力学に動かされ、言論の自由市場は、見かけよりもずっと歪み硬直している。敢えていえば、〝右寄り〟に傾いて、フェアな言論の場はとざされつつあるといってよい。このこと自体、――国会の機能喪失とともに――根本的な治療を要する大問題だが、さし当りそれは差し置いて、当面の問題にしぼってみることにする。

言論の場の歪みには、多角的な方策が必要だが、やはり言論をもって閉塞状況を少しずつでも開いていくことが、基本の方途になる。それに沿って、上記のアリーナを作るやり方として、戦争と平和に関する根本的な討議を行なうことから始めたい。最近の戦争論（及び平和論）には評価すべき優れた論考が少なからず出てはいるが、私の見るところ人間学的な視点から掘り下げた考察は、まだ不十分なようである。憲法九条について国民に開かれた、彫りの深い討論を進めるためには、戦争の人間学的な省察を重ねていくことが肝要だとおもう。以下、その試みの一端をここで行なわせていただくことで、閉塞打開の一助となれば幸いである。以下の行論が〝何だ当たり前の話ではないか〟といわれるようなら、筆者としては手を打って喜びたいところである。

〔なお、〝人間学〟とは何かについて、ここで立ち入る遑(いとま)はない。それについての私の論考は、他の拙著、例えば『法の人間学的考察』（岩波書店、02年）などの参照をお願いするにとどめる。〕

一、人類は異例の同胞殺戮者である

人類はこれまで、どれほど多くの戦争で、どれほど沢山の人間を殺傷してきただろうか。正確な数は誰にも分からないが、これまでの戦争の犠牲者は、億単位に上るだろう。歴史を繰ってみる度に痛感するのは、人類という種族のブルータルな好戦癖である。人類の歴史は、アイブル＝アイベスフェルトのいうとおり（『愛と憎しみ』70年）、「相つぐ残忍な殺戮の章の連続である。」古代ギリシャを中心とする戦争を詳述したヘロドトスやトウキュディデスの『歴史』の前にも、バビロニアやエジプト、イスラエル等で戦乱が繰りかえされていた。同じく司馬遷による厖大な『史記』の記述にもない戦争が、古代中国の内外で行なわれていた。人類は文明の開始いらい、大小の戦いで殺傷を重ねながら、老子が「不祥之器」（〝不吉な道具〟――『老子』三一章）と呼んだ武器を発達させて、今日に及んでいる。とくに二〇世紀には、大量殺戮を生じたいくつかの熱い戦争を行ない、ついに人類自体の生存を脅かす「核」兵器を作り、戦争の局面を質的に変化させるまでに至った。〝不祥之器〟は今や、「核」を中心に極点にまで達し、いつ落下してわれわれを殺すか分からぬ〝ダモクレスの剣〟となっている。

「核」の問題は暫く置くとしても、人類がこれまで行なってきた戦争は、この種族の際立った特異性を示してきた。戦争という組織的な同類殺戮の行為は、他の生物には見られぬ人間独特の現象だからだ。生物界には、南米に住む軍隊アリのように、見境なく殺戮を行なう兇猛な生物もある。しかし、殺傷目的で作った武器を使って、意図的・組織的に同類と殺しあう動物は人間だけである。最近ではライオンやチンパンジーなどでも、時には同類殺を行なうという報告がある。しかし、彼らの行為は、性や食にかかわる例外的な行動であって、武器などを用いた組織的行為ではない。しかも人間は、戦争とそれから生ずる惨禍に対して、種々の理由をつけて正当化するけれども、他の動物はそんなことはしない。戦争という意図的な同胞殺戮は、やはり生物界には例のない人間独自の所業である。

もう一つ戦争に加えるべき人間的特質は、同類でありながら、「敵」に対する容赦のない残忍さである。人間の集団が「敵」と見なした他の集団と戦うときの残酷さは、格別である。人間は自らの大量殺戮を棚上げにして、猛獣が生存のために弱肉を食う光景を誇張し、〝獣は無情・残忍だ〟という勝手な話を流布させてきた。イソップ物語等で、冷酷無残な悪者とされる狼などは、その典型的な被害者である。だいたい狼やハイエナのような、人間に憎まれた食肉獣も、食欲を満たせば、人間のような略奪や暴行、破壊や殲滅戦などの余計な残虐行為はしていない。ましてや憎悪や野心に駆られて同属を襲い、容赦なく殺すといった残酷な行為は、決してしない。むしろ狼らは、喧嘩はしても、敗者が首をさしのべて〝降参〟すれば、攻撃を加えないという寛容のルールを持っているらしい。それに比べると、人間ははるかに残虐かつ奸悪で、闘争も徹底している。エリコの住民を抹殺したイスラエル、カルタゴを根こそぎにしたローマ、サマルカンドの都市・住民を掃滅したモンゴル、日本でいえば比叡山を焼尽した信長など、「敵」殲滅の凄まじい例は、古来、〝東西〟にわたり沢山ある。それほどでなくても、戦争には憎悪や恐怖や怒りの感情の増幅が必至であり、兵器の向上と相俟って、人びとは異常な殺戮に駆り立てられる。その結果として、上述のような、自然界に類のない大量殺人が繰り返されてきた。この点ではアンソニー・ストーが言ったとおり、「憂鬱な事実ではあるが、われわれはかつて地上を歩いたもののなかで、もっとも残虐な、もっとも無慈悲な種族である」（『人間の攻撃心』68年、序論）と言わざるを得なくなりそうである。

二、戦争は悪である。現代戦争は最大の極悪である

戦争の本質を考える前に、その定義をしておく必要があろう。広狭さまざまな定義が可能だが、細かい議論は省略して、一応常識的に次のような規定しておこう。戦争とは、「政治的構成体（主として国家）が、何らかの政治的目的を達成するために、物理的力（主に武器）をもって対立集団と抗争し、自らの意思を相手方に強要する手段として、意図的かつ組織的に殺傷を行なう行為」である。〔この定義によれば、国家の外にも、民族や部族等でも政治的に構成され、意思決定能力と武器を持つ集団は、戦争主体となりうる。従って、政治的構成体でないヤクザ・暴力団等の武力抗争は、これに入らないが、右の条件を充たした内戦は戦争というべきことになる。〕

さて、このような戦争は、人間にとってどういう意味を持つか。端的に結論をいえば、それは倫理的にはまぎれもない「悪」の行為である。古今東西どの社会でも、〃人殺し〃は道徳上最も重い罪として非難されてきた。法的にもふつう、〃急迫不正の侵害〃に対処する〃正当防衛〃や緊急避難など非難可能性のない場合を除いて、最も重い可罰対象とされてきた。生命が尊貴だとすれば、〃殺す勿れ〃は法・道徳の第一命題となる。かつて日本の最高裁判所は、ある判決で〃人の生命は地球よりも重い〃という、いささかオーバーな表現で人命の尊さを強調した。その言葉を借りれば、何千何万個の地球を吹き飛ばすような〃殺人〃を意図的・組織的にかつ大量に行なう現代戦争は、超巨大な「悪」という外ない。

然り。戦争は悪である。〃人殺し〃が道徳上普遍的に禁じられる「悪」である以上、戦争はどのように正当化される場合でも、巨大な悪である。とくに大量破壊兵器を用いて、罪なき人びとをも大量に殺傷する現代の戦争は、道徳的に許しえない〃極悪〃である。あらゆる戦争論は、人間の生き方にとって重要な、この基本認識から出発しなければならない。

ただ、ここで触れておくべき問題が二つある。その一つは、ヨーロッパを中心とした死刑廃止運動との思想的関連である。死刑廃止論の根拠もいろいろあるが、その中心の骨子は、人命の貴重さと良心の回復可能性を前提として、次のように要約できるだろう。すなわち、〃極悪人といえども、国家がその生命を奪う権限はない。死刑という極刑の代わりに、犯罪者に改悛の機会を与える方が、人権にとっても社会防衛の見地からしても、はるかに有意義ではないか〃と。――個人の人格と人権を重んじ、重大な犯罪人にも人道的処遇を与えようとするこの理想主義的な主張は、尊敬に値する。しかし同じ地上で、何の罪もない多くの人びとが、戦争という国家の行為によって虫けらのように殺されている情況は、死刑廃止に情熱を傾けている人びとにどう映っているのか。もし〃次元が違う問題だ〃として、戦争を認めたり、何の関心も持たないとすれば、それは遁辞か自己欺瞞であろう。重い罪を犯した者に一掬の涙を注ぐならば、罪もなく幸せに生きたいと願っている無数の人びとが、戦争によって理不尽に殺傷されている現実に対して、何百倍何千倍もの熱情とエネルギーを傾けて、〃殺すな〃と叫ぶべきではないだろうか。ところがヨーロッパ諸国は、死刑廃止をECの加盟条件として、文明の高さを誇示しながら、他面で戦争の廃棄をめざす志を持つ気配はまったくない。（それどころか、戦争の要因にもなる武器輸出をさかんに行なっている国も多い。）このギャップは大きい。その矛盾を反省する声も、聞こえない。あえていえば、戦争を認めながら死刑の廃止を説くEC諸国は、人道主義の論旨の不徹底にとどまっているのか、〃戦争はやめられない〃という「現実」に妥協しているのか、回答を求められるだろう。〔それに答えられなければ、ECの死刑廃止論の半ばは、虚妄か、偽善か、あるいは自己欺瞞かという、厳しい疑問にさらされることにもなりかねない。〕

もう一つの問題は、〃戦争は悪だ〃という定言に対し、〃それがどうした〃と開き直って反論する立場から生ずる。そういう論者にいわせると、〃戦争は元来、非日常性の場に生じる異常事態だから、平和時の道徳基準でそれを「悪」ときめつけても意味はない。〃〃どこかの国が不当に攻撃を加えてきたとき、それを「悪」だと叫ぶだけでは何の解決にもならない。道徳を越えた非常事態に対しては、力で戦う以外にない。〃……こういった議論は、いわゆる現実主義者が愛好するロジックであって、それなりに世俗的には強い説得力を持っている。――これについては、項を改めて考えてみよう。

三、戦争は、許しがたい人工の大災害である

すぐ前に述べた主張のほかに、戦争を是認し・あるいは賛美さえする人びとは、いろいろな理由を挙げる。曰く、自衛戦争など、〃正しい戦争〃もある。曰く、戦争は人間の本性に根ざしているから熄むはずがない（だからそれに備えておくべきだ）。曰く、邪悪な敵に対する〃聖戦〃は、徹底的に戦わねばならない。（必要なら先制攻撃もかまわない。）曰く、戦争が惹き起こす愛国心や緊張感は、平時に生ずる怠惰・腐敗・堕落・懦弱などの悪徳を排除し、勇気・献身・自己犠牲・進取などの美質を涵養する。曰く、戦争はまた文明の推進にも寄与する。等々。……これらについては、先にいって個別に詳しく、批判的に検討することにする。しかしここでは先ずそれらをひっくるめて、〃戦争の禍害は、どんな正当理由をも凌駕する〃ことに、深く留意しておきたい。

武器が槍や刀や弓矢ぐらいだった頃は、一般民衆の被害はまだ限られていた。だが鉄砲や大砲の発明によって事態は一変し、軍隊の整備と相俟って、庶民を巻き込む悲惨な戦争となる。一六世紀初頭、エラスムスは、キリスト教徒同士が「地獄の兵器」（大砲などの火器、F・ラブレーも「悪魔の発明」と呼んだ）を使って殺しあう惨状を告発するとともに、「農夫や大衆の頭上に、この上もなく大きな災禍が降りかかっている」事態を見て、戦争を「何よりも憎むべきもの」と批判した。（『平和の訴え』箕輪・二宮訳、岩波文庫参照）当時の大砲など、今日の火器から見れば、オモチャのようなものだ。二〇世紀において飛躍的に発達した破壊兵器は、ヒロシマ・ナガサキでの原爆が示したように、一瞬に何十万人も殺傷できるものとなった。幼稚な大砲を「地獄の兵器」と呼んだエラスムスたちが、今日の水爆ロケットなどを見たら、何というだろうか。

「核」の問題以外に、各地に埋められた何億個もの地雷によって毎年多数の死傷者が出ている。アメリカ軍がベトナムで用いた枯葉剤や、イラク等で使った劣化ウラン弾などの犠牲者は、どれほどになるか分からない。カラシニコフ銃やプラスチック爆弾等による被害者の数も厖大だ。ましてや「核」兵器が使われたり、或いは原子力発電所が爆撃されたりすれば、惨害は収拾しがたいものとなるだろう。――それでも、〃国家がある以上、戦争はやまない。〃〃戦争を仕掛けられたら戦う外ない。それが現実だ。〃という声は、今でも強い。大方の現実主義者は、目前の「現実」への対応に追われて、生じうる戦争の災害を具体的にイメージする能力に乏しいのであろう。或いは、一般大衆がどんなに酷い目にあっても、「国家」の中枢部だけ守れればいいと考えるのだろうか。〔これは前大戦時に、天皇や軍・官僚の首脳を残そうとした「松代大本営」的構想である。――但し、生き残りの可能性や、生き残れたとしてもその後の自分らの存在意味について、なんらの展望も持たなかったのも、当時の現実主義者たちの心と予測力の貧しさを示していたといえよう。〕

とに角、古来戦争は、庶民にとって人工の大災害であった。古代の戦争も、一一～一三世紀の十字軍も、一四世紀の英仏間の百年戦争も、一六世紀ドイツの農民戦争も、一七世紀の三〇年戦争も、近・現代のどの戦争もすべてそうである。特

に現代では、死傷者は、軍人よりも民間人のほうがはるかに多い（おそらく3対7以上にもなろう）ことからいっても、戦争は庶民にとって〝最も憎むべきもの〟といわざるをえない。戦争は倫理的に「悪」であるだけでなく、（一部の人間が惹き起こす）異常な大災厄である。さらにそれは、人を殺傷し・家等を破壊するだけでなく、将来の子孫たちが使いうる資源までも大量に浪費し、環境にも多大の損害を加える。それらの損害額が非常に多大なものになることは明らかだろう。さらに、戦争による社会的混乱や経済上の被害などを加えると、この人工災害の大きさは計り知れないものとなる。これらの巨大な負の災害費を、貧しい国ぐにの社会福祉や教育や医療に向けたら、どんなに平和で安定した世界になることか。――〝敵殲滅〟の戦術しか念頭になく、こうした計算もできない戦争肯定論者の頭脳のニューロンの偏りには、恐怖を覚えずにはいられない。

四、戦争は、人間の最大の愚行である

戦争は道徳的に悪であり、人間の生活にとっても、文明にとっても大災害である。しかし、〝そんなことは分かっていても、やめられない理由がある。不正な攻撃から国民の生命・財産と自由を守るためにも、また紛争の最終解決の手段としても、戦争は必要だ〟という主張もある。果たしてそうか。そのような主張は、（現にアメリカがそうであるように）戦いをしたがる強者の側から出てくるようだが、そう主張する人びとにとっても、戦争をすることに、どれほどの意義があるだろうか。殺される側（弱い立場）にとって、戦争が大害にすぎないことは明らかだが、強者にとってもそれは、決してペイする（つまり利益になる）ものではないだろう。利害計算をしてみれば、むしろ多くの場合、勝者の利得よりも、実質上失うところが大きいことになると思われる。

第一に、戦争は紛争解決のやむをえない手段だといわれるけれども、戦争によって真に紛争の解決に至ったことは、滅多にない。かつての独仏間の抗争も、近時のアラブ・イスラエル間の対立も、戦争によって解決されなかった。ソ連のアフガン進攻、ロシアのチェチェン制裁戦、アメリカのベトナム戦争や（今も続く）イラク侵略戦など、どれをとってみても、事態は解決どころか、逆に火種を残したり、国際的不信を買うだけで、強大国の蒙った実質上の損失は多大である。第二に、これら近時の戦争が示すとおり、殺傷・破壊が行なわれた国ぐにの住民は、怒りや憎しみを抱いて、進攻した強者に長く敵対するだろうから、事態はむしろ悪化する。〝テロを制圧する〟として始めた戦争が、かえってテロを助長するというパラドックスは、戦争の愚かしさを立証しているではないか。第三に、対イラク戦争でブッシュが掲げた〝アメリカ国民の自由と安全を守る〟という目的なども、まったく逆効果になっている。現にアメリカはテロの頻発に怯え、しかもそれを防止するためのきびしい統制手段をとることによって、守るべき国民の自由をも著しく制限するという矛盾に陥っている。これらすべては、戦争が有害無益の愚行であることを示している。〔この戦争のため米政府は、03年の国防予算として約三八〇〇億ドル（何と五〇兆円）という巨額を要請した。もしこれだけの資金を平和・友好の文化費に当てていたら、アメリカは多くの信頼と感謝を得て、真の自由・安全を確保したであろう。不当な戦争は、同時に愚劣な戦争であったといわざるをえない。〕

以上の諸点を要約すれば、戦争は人間の行なう悪である上に、最大の災害であり、矛盾にみちた愚行である、ということになろう。それでもなお、この愚行を重ねているのは、どういうことだろうか。〝人間の本性に根ざしているから、仕方がない〟と諦めるべきだろうか。〝正（聖）戦は戦うべきだ〟と猪突するしかないのだろうか。

〔未完〕

（こばやし・なおき、法律学者、本会会員）